

## V o l . II TAKE OFF

3年目で初めての関東大会に出場した男子部に加え、平成元年に女子部が始まり、男女大所帯に生まれ変わった。少なからず軟派に変わった部を見て嘆くOBも少なくなかったが、結果として良いステップアップだったような気がする。平成4年に女子も神奈川関東大会から出場し、同年に中等部が設立され、さらに地元の子ども（小学生を主に対象とする）を集めた「岩名ジュニア」も順調に成長し、チームに深みができ、立体的に大きさを増していった。

しかし、部の指導は端からみるほど簡単なものではなく、選手個人個人の持つ問題、悩み、不安そしてそれぞれの持つ目標が異なり、私自身、この頃窮地に陥ったことは事実であった。そんなチームに2つの明るい材料が幸運にも舞い込んできた。1つはバドミントンがバルセロナオリンピック以来正式種目として取り入れられ、選手の目標を「オリンピック」に持ち上げ、さらに世界に目を向けた選手作りができるようになったことである。先日、ある指導者から「西武台の子達は本当にオリンピックを目指していると言っていたよ。」とばかりにされたことがあったり、選手自身もその手の指導者から冷やかされることはしばしばあると聞いている。最初は冗談でも、今は本気である。そんな志しの高揚は、チームを少なからず支えた。2つ目はなんと言っても平成5年の千葉県初制覇、全国大会（インターハイ）初出場であろう。この話しには「国体準優勝、全国版NHKでの放映！」という大きなおまけが付くのではあるが、その結果がもたらしたチームへの影響は予想を遙かに越えるほど大きい。県の初優勝の詳細はすでにT&B（部報）で述べているが、その時の周囲の選手達の様子をここに付け加えておきたい。6期生エース小倉君は最後のシングルス、決勝対敬愛戦の終盤で全身けいれんを起こした。コートに倒れる小倉、場内は静まり返る。立つ。ラケットを気力で握る……。その時特別にコートサイドに用意された観客席は一杯だった。まさかの負けに不安がる敬愛応援団は今だかつてないほど応援に力がこもる。倒れる小倉に笑みを浮かべて見つめ、隣の仲間と手を握る敬愛の女子選手。当然と言えば当然だが勝負の世界は酷である。敬愛押せ押せのムードが場内に漂う。西武台千葉側は、現役の男女、そして西武台中学生、OB、保護者……大勢が止まっている。その当時、私はトラブルで女子の一部のレギュラーと絶交状態で、お互い口もろくろく聞かない状態だった。今にして思えば自分の技量の無さに気づくが、なにしろ女子が加入して

まだ日が浅い。そんな彼女らを私は見た。「どうだお前ら、こうして男子は頑張っているだろう。それに引換お前らは…」と今さっき3位に決まり、団体でのインハイ出場がダメだった彼女らを見渡すと、泣いている。こんな小倉の死闘を目の前に、涙を流して応援をしている子がいる。祈るようにそして、自分の辛さとオーバーラップさせてだろう。静まり返った場内から、彼のパートナーの母さんから「小倉君ガンバって！」と声がかかる。実にすがすがしい、タイミングの良い応援だ。席の前列にはOBが座っている。自分達が成し得なかった夢が、今叶いそうである。それぞれが、それぞれの思いを込めて胸が一杯になっている様子がわかる。さらに、ちょうど8期生がまだ入学間もなく、右も左もわからない状態でなにしろ応援に全力を尽くしている様子、中学2期のまだ幼さがたっぷりの子どもたちもこのお祭り騒ぎに酔っている、そんな光景を横目でちらちら見ながら、最後のシャトルが落ちると、全員が立ち上がった。飛び跳ねる。抱き合う。親も子もみんなはしゃぎまわっている。優勝を全員が全身で表している。私も感無量、涙があふれる。だが、今こうして思うと、その優勝にいつまでも浸らず、その時両手放しで喜べなかった子がいたことに、少しでも気がついていれば良かったと、後悔に耐えない。一言でも良かったから、辛さをわかってやる言葉を投げかけてやれば良かった。いずれにせよ、この優勝はチームを一新してくれた。その後、あわや部を辞めそうにまでなった、トラブルを起こした女子選手達は、数カ月、自分の心と戦いながら、インハイの夏を送った。彼女らはプラスに自分を責めた。私とはほとんど口も聞けない状態のなか、暑い夏を「自分を鍛える」事で昇華させた。夏の終わりに全日本ジュニア千葉県予選で大塚（7期女子エース）が優勝し、その日久しぶりに彼女とじっくり話しをした。嬉しかった。私自身心にひっかかっていた何かきれいにとれて、やる気がおおいに湧いてきたのを感じた。その後この大塚が先頭になって、西武台千葉女子部も輝きを増し、県内でも屈指のチームに成長した。この10年目を迎え、小倉選手、大塚選手共に、関東、関西に別れてはいるがトップレベルの大学で活躍し、今年のインカレ（全国学生選手権）、国体と活躍している事はこれからの選手にいいカンフル剤になっている。

雪国の子ども達は、オリンピックの金メダルを当然のように目指す。どんなに田舎の名もない高校球児でも、素振りをするバットの先に甲子園を夢見る。これからももっと、もっと大きな夢を見よう、そしてそれを実現しようと思っ直したのがこの時期だった。

彼は高校教師を目指していた。

中学校の先生をしながら、高校の採用を待っている状態が続いた。中学生達と教師生活をそれなりに謳歌しながら、ひそかに夢が実現するチャンスを待っていた。彼に言わせると、自分は小学校でも中学でも構わない。が、できることなら、大人になる、社会に出る直前の微妙な年齢の子供達を教えたいのだそう。そんなある日、もしかしたら採用が決まるかもしれないと聞かされた学校は、千葉県の新設校だった。もしかしたらという話しはこれまでも何度かあった。また今度も空振りになるかもしれない。半信半疑であった。

「本当に学校があるか見に行こう」

夜のドライブで野田まで来た。

川間駅でタクシーの運転手に、この辺に今度高校ができると聞いたのですが…と尋ねる。「そんな話し聞いたことねえな」と言われるかもしれない。が、運転手は親切にも、紙に地図を書きながら郵便局の角を曲がる道を教えてくれた。

川間中の脇を過ぎると、何やら建設中の校舎らしきものが見え、『武陽学園』の看板を見いだした。

私達は、偶然にも以前この近くに来たことがあった。この辺りがデートコースのひとつになっていたからだ。電車でくる時は、江戸川の向こう側の南桜井の駅から河川敷まで歩いた。車で来る時は、グライダーを見に野田の河原にやってきました。そうそう、今思うと小林コーチの家の近くをよく通っていたことになるのです。その頃コーチは小学校2、3年生かな。山に囲まれた信州で生まれ育った私は、ただ広いところに来るだけで涙もなく感動していた。そんな思い入れのある土地なので、この偶然に因縁のようなものを感じた。

彼は翌春、埼玉の西武台に赴任した。そして1年後、武陽高校に就き、しばらくして結婚した。

いきなりジャージ姿でラケットケースをかついで体育館に登場した先生は、1期生の目にどう映ったのだろう。部活を持って1月もしないうちに、1期生全員が体育館に来なくなった。「どうしたらいいかな？」と、夕方車の中でそ

んな話しをポツリとする。「2期生はどうしてるの?」「みんな来てる」「じゃ、いいじゃない。今まで通りやれば」

現場で生身の人間と向かい合っている夫の日常に、軽い言葉でかわしてしまっただが、誰か一人でもついてくる人がいるなら、あなたは変わらず頑張っていて欲しいと願いを込めて言った。夫は言葉少なく、「そうだな」とうなずいた。

この年初めての夏合宿が長野で行われた。バスから降り立ったのは、青白い顔をした少年達だった。1、2期生たちである。青い空とジリジリと熱い陽射しとは対象的な彼らであった。「中学生かい?」などと近所の人からも聞かれたものだった。しかしその日、このひ弱な少年達に鳥肌がたった。練習後体育館の床にぞうきんをかけ、シャトルのゴミをはき集めていた。誰一人無駄口をきくものもなく、練習中の緊張感のまま掃除は行われていた。更に、ホウキでは掃除しきれないシャトルの粉を、なめて濡らしたてのひらで、夢中ではいつくばってかき集めていた。まるでひたむきに、この床に、この部活に何かをかけるかのように。

自分も高校時代バドミントン部にいたが、練習後は走ってモップをかけた。キュッキュとこする雑巾がけすらも珍しい光景なのに、誰に指示された訳でもなく、ちりひとつ残さぬようにと床にはいつくばる姿に圧倒された。

どうしてここまで? というときどきと共に、たいへんな事が始まっているのかもしれないという、恐れにも似た感情を抱き、私はその場に立ち尽くした。「いいじゃない」などと軽い言葉では済まされない、まさに真剣勝負の中に夫がいたことに気づかされた。

こうして始まった9年間は短かった。初めて天台の体育館に行った日がついこの間のように感じられる。それでも、1期生が自分が結婚した年齢になることを知り、歳月は確かに10年を刻んでいることに気づかされる。また、保護者との年齢差が縮まってきていることも。当初は親子ほど年の違う保護者もいたが、今やお兄さんお姉さんくらいの年齢に近づいている。

私達は2年前野田に引っ越し、いよいよバドミントン部がベースのような生活が始まった。たびたび体育館で遊ぶ娘は、部員から礼儀を学びバドミントンを教わり、部にひたっている。集合の声を聞けば先生の前に走り、「きをつけ」を聞けば条件反射的に「れい、ありがとうございます」を言う。車に乗るときは「お願いします」、降りるときは「ありがとうございます」。娘は部員の背中をみて育っている。お父さんのことを「師匠」とは、まだ言わないが。

しかし、楽しいことばかりだったと言えば嘘になる。休日を父親と過ごす家族をみて、娘は羨ましそうな顔をする。

「あなたには、休みの日にお父さんと遊ぶような普通の家族の生活はないけど、おにいちゃん、おねえちゃんがいつもいっぱいいるでしょう。普通の子にはできないことだからね」

大人に言い聞かせるような言葉で、娘に語る。いつかわかる日がくると思いながら。自分にも言い聞かせるために。

これからも続くバドミントン部中心の生活に、最近多少変化が出てきた。今春から地元の小学生に、OBと協同でバドミントンを教え始めた。夫や小林コーチ、部員達からバドミントンの指導法を教わるために、たびたび体育館に行くようになった。ラケットワーク、フットワークを観察する。これで暑い体育館も今までほど気にならなくなる。

こんな天気の日には上空をグライダーが飛んでいるはず。だが、シャトルを追う彼らが気づくはずはない。体育館を出てグライダーを見つけると10何年前のあの日が一瞬思い返されるが、暗幕をくぐり体育館に入った途端、今を精一杯生きる彼らにグイッと引き戻される。

